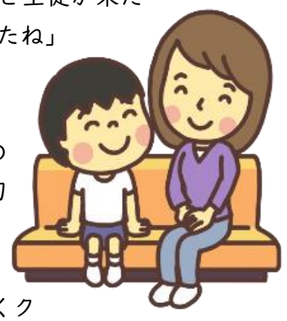
「県Ｐ連が行く」不登校について

松本　不登校の子供は増加の傾向にあり理由は様々だと思います。不登校支援には学校復帰、学習支援、居場所作りなどがありますが、昔は学校復帰を主にされていたと思います。私たち保護者としては子供に引きこもりになってほしくない、社会とのつながりを無くしてほしくないという思いだけです。今は大きく変わって学校復帰だけではなく外に出ようよ、誰かと絡もうよ、それはオンラインも含めてそのようなことをしていただける時代になってきています。今の不登校の子供たちの現場での支援はどんなことが行われているのか具体的な例をお聞かせいただければと思います。

横山　生徒が登校した時のタイミングで話をする。誰とでもいいからつながるということで担任だけではなく管理職やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携して、学校の中にいつでもきていいよという場所をたくさん作っています。

勉強が遅れる、将来困るよという話ではなく、生きていく力を付けられたらいいと思います。コミュニケーションを取ることが大事で話すうちにだんだんよくなっていくこともあるので、学校の中に話ができる人が居ること生徒が来たら全職員は「待っていたよ、よく来たね」と声掛けをするようにしています。



石橋　休みが続く児童がいたときは心のつながりを切らさないことが大切だと思っています。教師と子供のつながりも大事だと思います。壱岐市の場合は小規模校の学校が多くクラスの中に気が合う友達が必ず存在するとは限らない環境にあります。30 人 40 人居れば中には気が合う子も居るとは思いますが、そうではないパターンが増えてきています。グループができて孤立するような場合もあります。それでも、みんないい子だから、

休みが続く児童がいたときは心のつながりを切らさないことが大切だと思っています。教師と子供のつながりも大事だと思

います。壱岐市の場合は小規模校の学校が多くクラスの中に気が合う友達が必ず存在するとは限らない環境にあります。30 人 40 人居れば中には気が合う子も居るとは思いますが、そうではないパターンが増えてきています。グループができて孤立するような場合もあります。それでも、みんないい子だから、周りの子も頑張って合わせようとするけど、ぽつんと一人になることだってあると思います。そんな時「心はつながっているんだよ」ということを表すことはできるよねと子供たちへ指導するようにしています。教員から子供に対しても同じように「ずっと見守っているよ」など具体的な言葉にして伝えるのが大切なことだと思います。今は、学校に行くことが全てではないという時代になってきているので、学校の立ち位置も難しいところなのですが、学校としては来て欲しいと願っています。それは子供たちが社会とのつながりを切らさないで、親や先生がいなくても一人で生きていける子になる上で学校はいい学びの場であるからです。多少苦しいことがあってもそれを乗り越える経験ができるのも社会の縮図といわれる学校のよさの一つではないのかと思います。

松本　親として自分の子や知り合いの子供が不登校になったときどのような支援をして欲しいですか。

渡野　親が子供に声掛けをするときに優しく声を掛けられたら良いのですが、だんだん強い言い方になっていくと思います。それを子供がどう受け止めるのかということもありますが、だんだん言うことを聞かなくなって引きこもりになってしまうと思います。そうなる前に少しでも登校できている内に、学校で話ができる誰かがいて、そういった居場所を学校に作っていただけたらと思います。

松本　私は県Ｐ連会長として不登校支援について、いろんなところでたくさんの方と話をする機会があります。その中で、子供の居場所作りは行政をあげて広げていく必要があると思います。学校を居場所の一つとして考えたときにどうしたら学校の教育環境を充実できると思いますか。

横山　教員の手が足りないときい、すぐに助けてもらえる地域の方がいたらいいなと思います。夏休みに市教委の方で、数日ですが居場所を作ってもらえて行政とタイアップできているのでいいなと思います。

石橋　不登校気味の子供がいることを前提として話をしていますが、学校に来たときに個別に対応できる空き教室が少ない学校も多くあると思います。その前段階で、渡野会長が言われた先生と連携しての後押しということは、すごくありがたい考え方です。でも今は学校だけが全てではないといった時代の中で登校刺激をしないで欲しい、子供の考えを尊重しますと言われる家庭も増えてきています。そうなれば学校は手を出せない状況になりますが、そのことは保護者の方が責任をもって決めることだとも思います。そのためにも親としてのたくさんの学びが必要で、選択肢をたくさん持つことが大事だと思います。

松本　横山先生が言われた学校に来たときに話す人がいる。この安心感、親としてすごく有難いことです。しかし、別室登校の児童、生徒の対応をしているのはその時間帯に授業がない先生、ご自身の仕事もあるにも関わらず児童、生徒と話をしてくれている。これからどんどん増えていくのであろう児童、生徒の対応をそれでいいのか？と疑問に思います。これについて行政も対応していただきたいし、保護者も協力したいと思っています。やはりここは、支援員を入れるべきだということ、石橋先生が言われた教室が足りない問題でも別室登校の子供が通える環境と居場所を最低限作って欲しいといった声を、連合会としても行政に上げていかなければならないと思います。